

長島潤作 「ヒナの巣」

(効果音) (街の騒音)
香川裕子ナレーション わたしは泣きながら、夜の街を歩いていた。何もかもが煩わしかった。
わたしの名は香川裕子。青春中学3年生。親に理解してもらえないわたしは、
今しがた、家族と口論の末、家を飛び出してしまった。それは、こないきさつ
だった。

(音楽) (ブリッジ)
(効果音) (テニスの音。生徒の掛け声。)
友達A テニスやめるって本当？
裕子 まだ決めたわけじゃないけど、ちょっとねえ。
友達B ああ分かった！ この間のテストの成績気にしてるんでしょう。
裕子 うん、そうなんだ。「内申書悪いから、都立のいいところはムリだ」なんて親に言
えないもん。
友達A でも裕子、偏差値はいい線行ってるんでしょう？ 私立向きなんじゃないの
の？
裕子 それがそうでもないんだあ。それに親が望んでる私立って分かる？ 有名校の
名前しか知らなくてさあ。
友達B そう そう。受かりそうな学校の名前言っても、全然ピンと来ないみたいだし。
「そんな学校あるの？」なんて言ってさ。
裕子 つらいよねえ。実力知ってるのは本人だけなんだもん。
友達A うん。先生だって分かってくれないのよねえ。無難な学校ばかり勧めるんだか
ら。
友達B あたしたち憂うつね。家に帰ったらきつと怒られるんだよ。
裕子 頭は親に似るからしょうがないのにねえ。
友達A 親だって、昔は大してできもしなかったくせに、なんでもできたようなこと言うん
だから！
裕子 ま、しょうがないね。それが親ってもんだから。わたしも、この際、好きな部活も
やめて、やれるところまでやるっきゃないと思ったわけ。じゃあね。
友達 (口々に)じゃ、バイバイ。頑張るってね！
(効果音) (戸の開く音)
裕子 (疲れた声で)ただいま。
弟 あ、お姉ちゃん、お帰り。
母 お帰り。遅かったじゃないの。
裕子 (不機嫌に)部活よ。

弟 さっき電話がかかってきたよ。ほら、いつもかけてくる男の子。

裕子 あ、そう。

母 裕子、その子、どういう人なの？

裕子 クラスの男の子よ。

母 どういう付き合いかたしてるの？ いけませんよ！

裕子 お母さん、そんな言い方することないでしょう？ まるで悪いことしてるみたいじゃない。

父 裕子。「そんな言い方」とはなんだ。お母さんはお前のこと心配して言ってるんじゃないか。

母 来年は高校受験でしょ。「部活だ。男の子だ」って、そんなことしてたらどうなるか分かってるの？

裕子 ほっといてよ。なんにもわたしのこと分かってないくせに！

父 ほっとけないね！ 大事な娘のことだぞ。お父さんたちがなんにも分かってないって言うなら、説明してごらん！

裕子 言ったって無駄よ。頭から悪いってきめつけてるんだもん。

母 なんてこと言うの、親に向かって！

裕子 「親、親」って偉そうに言わないでよ。「心配してる」なんて言ったって、結局自分たちの思い通りにしたいだけじゃない！ あたしだってちゃんと考えてるわよ。

父 黙りなさい！

裕子 もういいわよ！

(効果音) (戸が荒々しく締まる音)

父、母 裕子！

(音楽) (ブリッジ)

(効果音) (街の雑踏)

裕子(モノローグ) おなかすいたなあ。何も飛び出してくることなかったんだ。でも、あんな言い方することないよ。少しでも親を安心させたくて、部活もやめようと思ってたのに。それにあの子のことだって、別にヘンなこと何もしてないもん。それなのに…。

ナレーション もうどのくらい歩いたろうか。どこをどう歩いてきたかも覚えていない。わたしは泣きはらして赤くなった目をこすりながら、時計を見た。夜中の12時半。見たことのない街並みは、わたしの不安を募らせた。でも一方では、このままどこまでも歩いていきたかった。そしたら、この夜のやみの中に吸い込まれて、消えてしまえそうな気がした。

(効果音) (バイクの近づく音)

男 よお！

女 何してんのよ、こんなところで？

裕子 何って、別に…。

女 「別に」って、もう12時過ぎてんだよ。おかしいじゃん。こんな時間にセーラー服着てさ。

裕子 あたし....

男 そんな格好してる場所見ると、家でも出たんじゃねえの？

女 泣いてたんだ。目真っ赤にして、かわいい顔が台無しじゃん。

男 お前、バイクの後ろに乗れよ。

裕子 え？

男 腹すかしてんだろ？

裕子 あたし....

女 見りゃあ分かるよ。何か食わしてやるからさあ、グズグズしてんなよ！ あんた、今からあたしたちの仲間だよ！

裕子 ありがとう。

(効果音) (バイクの発信音)

男 しっかりつかまってなよ。夜の街、バイクで吹っ飛ばすとスカッとするぜ。

(効果音) (バイク、遠ざかる)

(効果音) (ハンバーガーショップ)

女子店員 ありがとうございます。ご注文まだのお客様。

客 ポテト1つ。小さいやつな。

女子店員 かしこまりました。

男 そうかあ。みんなそうなんだよなあ。親なんてなんにも分かってないんだ。

女 「心配してる。愛してる」って、スゲエムカつくんだよな。気に入らねえとすぐつぶしやがる。

男 (あっけにとられて)お前、言葉遣い悪くなったなあ。

女 何よあ。知らない女の子の前だからって、上品ぶりやがって。あたし、せいせいしてるんだ。うち出てきて。

男 そうか そうか。ほら、裕子ちゃん、もっと食べて。

裕子 ありがとう。

女 あんた、今夜どうするの？

裕子 今夜？

女 しっかりしなよ。あんた、帰るところないだろう？

男 もう行くか。

裕子 どこ行くの？

女 ついてくりゃ分かるよ。うち、おん出されたんだろう？好きなことしようじゃん！

裕子(モノローグ) どうしよう...。怖い。でも、この人たちと別れて、どこに帰ればいいのか。ちょっと怖いけど、今のわたしの気持ち分かってくれるのは、この人たちだけなんだ。

(効果音) (バイクの止まる音)
店員 (オフ)ありがとうございます。またどうぞ。
裕子 何か買うの？
男 バカ！ 黙って頂いてくるの！
裕子 え？
女 ま・ん・び・き！
裕子 そんな...。
女 あーあ、だからイヤだって言うんだよ、お嬢さんは！
裕子 だって、お母さんに...。
女 お母さん？ お母さんなんて、もういないじゃん。
男 そんなこと言ってるよ、置いてくぜ。
女 親がいるときとは違うんだよ！ あんた、あしたからどうやって食ってくのさあ。
裕子 だって...。
男 だから、教えてやるよ、やり方。知らん顔してついてきな。
裕子 だって だって...。
女 ほら、行くんだよ！
補導員 ちょっと、君たち。
男 ヤベー。逃げよう。
裕子 (必死に)待ってえ！
(効果音) (バイクの去る音)
補導員 置いてかれたんだね。ちょっといらっしゃい。わたしはこういう者だ。
裕子(モノローグ) 警察手帳...。
ナレーション 一瞬、背筋が寒くなった。お父さんの怖い顔が目に見えた。お母さんはなんと言うだろう？ 学校の先生は？
補導員 それで、君はカッとして家を飛び出したんだね？
裕子 はい。
補導員 うん。ま、お茶でも飲みなさい。
(効果音) (遠くで車の音)
補導員 君のご両親は、君のこと本当に愛してないのかな。
裕子 ...。
補導員 心配してるから、注意するんじゃないの？
裕子 ええ、それは分かっています。でも、あんな言い方しなくたって。
補導員 うん。ま、親なんてね、思ってることの半分も子供に伝えられないんだよ。不器用なんだな。でもこれは分かかってほしいなあ。お互い、神様じゃないから、黙ってちゃ分からないことがたくさんある。なんでもだから言ってみるんだよ。今、分かってもらえなかったら、また言ってみる。ほら、聖書って本、知ってるだ

る？ あの中にも、何度も何度も頼んだら、やっと聞いてもらえた人の話がある。そしてまた、子供が魚をくださいと頼んでるのに、蛇を与える親はいないとも書いてある。人間同士が完全に分かり合えることなんか、本当はできないのかもしれないけど、そこは親子じゃないか。信頼し合うんだ。信頼を裏切るの一番マズいやり方。一度失った信頼を取り戻すのは、大変なことだからね。

裕子 あの一、おじさん、ひょっとしてクリスチャン、ですか？

補導員 ン？ ああ、そうだよ。

裕子 やっぱし。わたしも小学校の時、教会学校に行ってたんです。さっきの話、魚と蛇の。あれ知ってます。思い出しました。

補導員 そうかい。それはよかった。裕子さん、だったね。君は小鳥のヒナを見たことがあるかな？ 大きな口を開けて、親からエサをもらってるところ。

裕子 はい、写真なんかで。

補導員 うん。あれねえ、小鳥にエサをやるのは、親の本能なんだそうだ。みんなに平等に、なんて考えちゃいけない。だからヒナは、みんな必死になって口を開けて催促するんだよ。気の弱いやつは、食べさせてもらえないで、死んでしまうんだ。人間の親は、小鳥とは違うよね？ どの子もかわいい。どうしたら、そのこのために一番いいだろうって、いつも考えている。

裕子 そうかなあ。

補導員 そこんところが、子供にはよく分からないんだねえ。もちろん、親のエゴもあるよ。見えもあるだろう。人間は、その点ではみんな自己中心だ。でも子供を愛してることに変わりはないんだよ。わたしも 3 人の子の親だからね。真ん中の子は裕子さんと同じだ。

裕子 ほんとに？

補導員 ああ。一丁前のことを言うようになったが、かわいいもんだ。だが、子供はヒナに見習わなくちゃいけないな。親が心配してくれることが分かっているのなら、もっと積極的に理解してもらおうよう努力をするんだよ。投げやりになってしまったら、何もかもおしまいだよ。

(効果音) (電話のベル)

補導員 もしもし、はい。(間。相手を聴いている。)あ、香川裕子さんね。今、こちらで保護してます。(間)いや いや、大丈夫ですよ。元気にしてます。(間)はい はい、お願いします。

(効果音) (受話器を置く)

補導員 ご両親が迎えに来られるそうだ。お母さん、涙ぐんでたぞ。ほら、もう大丈夫だね？

ナレーション わたしは黙ってうなずいた。その時、わたしは、巣から落ちかかったヒナ鳥が、エサを求めて小さな口を開けながら、必至にはい上がっている姿を想像してい

た。

<完>